

令和2年度 関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・分析業務
業務実施報告書

【貴団体概要】

団体名	合同会社巻組
事業名	ギフト経済の見える化による関係人口創出事

1 事業概要・主な成果

1.1 事業概要

(1) 事業概要

余剰資産を持つ寄付者より余っている資源を集め、それを原資にクリエイティブな生き方を目指す入居者が一定期間滞在して自立を目指すための生活環境を整える。この結果、空き家が活用され、入居者により投資価値のある新しい事業が生み出され、地域経済を動かす。

(2) Creative Hub の仕組み概要

① 寄贈を集める Web プラットフォームの構築

資源が余っている寄付者より、「モノ」「カネ」「仕事」いずれかの形で資源を集める。

② 寄付品を集め価値化するためのストックヤード

ギフトバンクに集まった、特にモノを集め、仕分けして価値化する。アーティストなどのクリエイターに材料提供したり、DIY を行う人々に材料として提供。

③ 入居者が自立に向かうための一次的な生活環境

ギフトバンクに集まった資産を元に、一次的な生活環境として住居とワークスペース提供する。

④ 自立した住人の事業の価値化

アシュラムの入居者が自立した際に、生まれる事業を発信し投資価値を高める。また、こうした人材が地域に輩出され、フォロワーを増やすことで周辺の不動産価値を高める。

(3) 本事業を通して行う今年度の活動内容

① 入居者を集め地域との関わりを持つ機会を創出

ア) 資材を集め、クリエイティブリユースを推進する倉庫をオープンする
地域の不動産を借り上げ Creative Hub (倉庫) をオープンする。

イ) 入居者を集め入居した人々を地域の人手不足の現場につなげる

経済的に孤立した入居者を集め家賃無償でシェアハウスの空室に入ってもらう。

入居した方々が地域で生活できるように、一次産業や介護事業の現場など人手不足の分野につなぐ。

ウ) 倉庫の利用者向けに、資材を使ったワークショップを行う

倉庫が地域の人々と入居者のコミュニケーションの場となるように、芸術やものづくりに関するワークショップを行う。

② 関わりを持続的なものとするための仕組みの検討

ア) 関係人口づくりに関して、先進事例を取り入れるための検討会議

イ) 石巻市と雲南市で継続的に意見交換をし、地域ごとに持続的なモデルを考える

③ 自立化・持続化に向けた検討

ア) Creative Hub を進めることにより連鎖的な不動産開発につなげる

イ) 事業拡大に向け PR のための宣伝資材を作る

1.2 主な成果

(1) 入居者を集め地域との関わりを持つ機会を創出

① 入居者の募集

石巻：10名（主な入居者：大学生3名、アーティスト：7名）

雲南：10名（主な入居者：大学生6名、アーティスト：4名）

② 入居者であるクリエイターの活動発信、地域住民との交流の場として物々交換市を月に1度開催

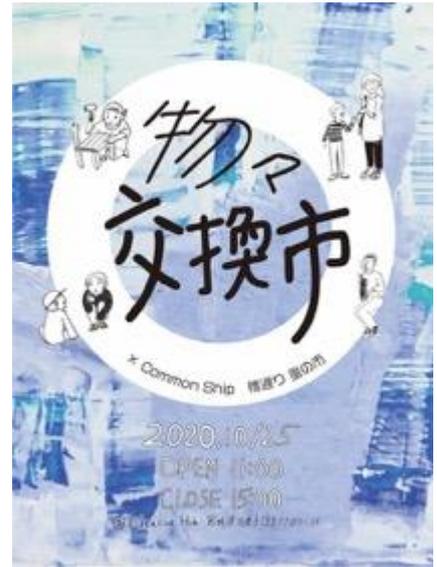
R2.7月～R3.1月まで、計7回開催。

ア) 実施日：7月25日／8月30日／9月27日／10月25日／11月29日／12月26日／1月31日

イ) 参加人数：各回 約30名程度(計210名)

参加者属性：地域の商店主(10%程度)、子供づれの家族(30%程度)、出展者知人(30%程度)、地域の高齢者(20%程度)、市外からの参加者(10%程度)

ウ) 出展作家：15組（クラフト、アート、企画、食器、地域の商店 など）



(2) 関わりを持続的なものとするための仕組みの検討

① 先進事例を取り入れるための検討会議の実施

・12月16-18日：検討会議 ②長崎市/福岡市/久留米市

・1月22日：検討会議③石巻市

・2月15日：検討会議④諏訪市

② 石巻市と雲南市での意見交換

・10月19日：オンライン

・11月2-4日：雲南

・2月16日：長野合同視察



(3) 自立化・持続化に向けた検討

① Creative Hubを進めることにより連鎖的な不動産開発につなげる

ア) 期間中、石巻・雲南あわせて3箇所の空き家の活用につながる

② 事業拡大に向けたPR商材として、動画の制作と写真の撮影を行った。

(2)～(3)の結果、来年度あらたに長崎市・上松町・加美町と連携して広げる見通しがたった。

2 モデル事業実施地域の概要と課題

2.1 事業実施地域の概要・課題

(1) 実施地域の概要

[宮城県石巻市]

・人口：141,648人（2020年5月現在）

・高齢化率：33.1%

・現状：2011年の東日本大震災以降、9年間で約2万人程度の人口が失われた。また、この9年で復興予算を利用し、市内に約7,000戸程度の新築の家屋が供給されたが、その裏で、13,410戸（2019年住宅土地統計）と全家屋のうち19%が空き家になっている。

一方で、震災を契機に1年間で約28万人のボランティアが市内を訪れうち約300名程度が定住したと推定される。さらに2017年から始まるリボン・アートフェスティバルが追い風となり、一次産業の担い手となりながら自身の新規事業や芸術活動に取り組む若者が増えつつある。

[島根県雲南市]

・人口：35,829人

・高齢化率：38.88%

・現状：島根県雲南市は2011年より次世代育成事業「幸雲南塾」を展開し、180人を超えるチャレンジを生み出すことによる地域課題解決に繋げている。このプロセスにおいて、資金援助以外の市民からの応援やおすそ分け、寄贈などが起こしたプロジェクト実現への貢献は非常に大きい。また、このようなギフト経済的な関係に共感した若者の移住も年々増えており、幸雲南塾や市民との出会いがきっかけになり定住/多拠点生活先として雲南を選んだ若者も50人を超えている。コロナ禍が追い風になり、個人の暮らし方や働き方を再検討している人からの問い合わせも増加している。

(2) 実施地域の課題の概要

1. 人口減少・高齢化が進み、多世代間の繋がりが希薄化している

いずれの地域も急速に人口減少が進み、高齢化率は30%以上と全国的に見ても高い水準となっている。一方で、自治体として地方創生施策に非常に力を入れており、当該地域に移住を志す若者も増えている。地域の高齢者と若者の関係づくりと、その関係性の可視化が重要な課題となる。

2. コロナ禍において挑戦機会や学ぶ場を奪われた若者たちが首都圏で孤立している

両自治体では、地域内において若い世代を育て、地域外から意欲の高い若者を受け入れることが重要なテーマとなる。一方で、本年初頭に端を欲するコロナ禍において、ターゲットとなるような人材は下記の要因で経済的・社会的に孤立している。

- ・世界規模での移動制限に伴い、海外での挑戦機会を奪われた
- ・大学などの多くの高等教育機関で授業が全面オンラインになった
- ・経済が縮小し、雇用(両親が職を失った場合も)を奪われ、経済的に困窮した
- ・就職活動中の学生達は、進路を見失った

3, 大量生産型の市場経済がねづき、廃棄資源が多く生み出されている
住宅や、生活資材など大量生産・消費が当たり前となり、空き家や余剰資材の廃棄が生み出されている。

2.2 関係人口創出・拡大に関わる取組みのビジョン・テーマ設定

[事業のテーマ]

上記のように、都市部と地方の地域でそれぞれ社会的に孤立する人材同士をリアルな場でつなぐ仕組みを作る。

1. コロナウィルス感染拡大に伴い、挑戦機会や学ぶ場を奪われた人材を人口減少の進む地方都市に受け入れる
2. お金に止まらない価値の交換「ギフト経済」で地域の内外をつなぎ、関係人口の幅を広げる
3. ギフト経済を通して、地域内の未利用資源を活用し循環型の経済を生む

[事業のビジョン]

1. 地域資源を活用して、地域で起業などクリエイティブな活動に打ち込める若者を増やす
2. 若者を受け入れることによって空き家などの未利用資産を活用する
3. 若者が気軽に地域に滞在できるようにすることで、地域ごとの関係人口を増やし、一次産業や介護事業者など人手不足の産業の担い手となる

[本事業における SDGs 対応領域]

1. 貧困を無くそう
2. すべての人に健康と福祉を
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任・使う責任
17. パートナリーシップで目標を達成しよう

3 モデル事業の取組内容

3.1 取組みの全体像・スキーム



図：クリエイティブハブのスキーム

(1)スキーム：空き家を活用した関係人口づくり

① 空き家の活用

地域の不動産屋やオーナーから空き家を借り受け、滞在や制作が可能ないようにリノベーションする。

② 人材募集

Web サイトや SNS を通して、人材を募集。今回入居の 20 名以外にも 5 人ほどの問い合わせがあった。

また、イメージ PV やパンフレットを作成。メディアなどにも取り上げていただくことで広告効果を高める。

③ 滞在場所の提供

1 で活用した、空き家の一面を入居者に無償提供。宿泊施設やシェアハウスにおける他の住人のケアなどを手伝ってもらう。生活支援の一環として、一次産業や介護など人手不足の職場にアルバイトとして紹介する。2 年目以降、継続的に入居する際は家賃が発生。

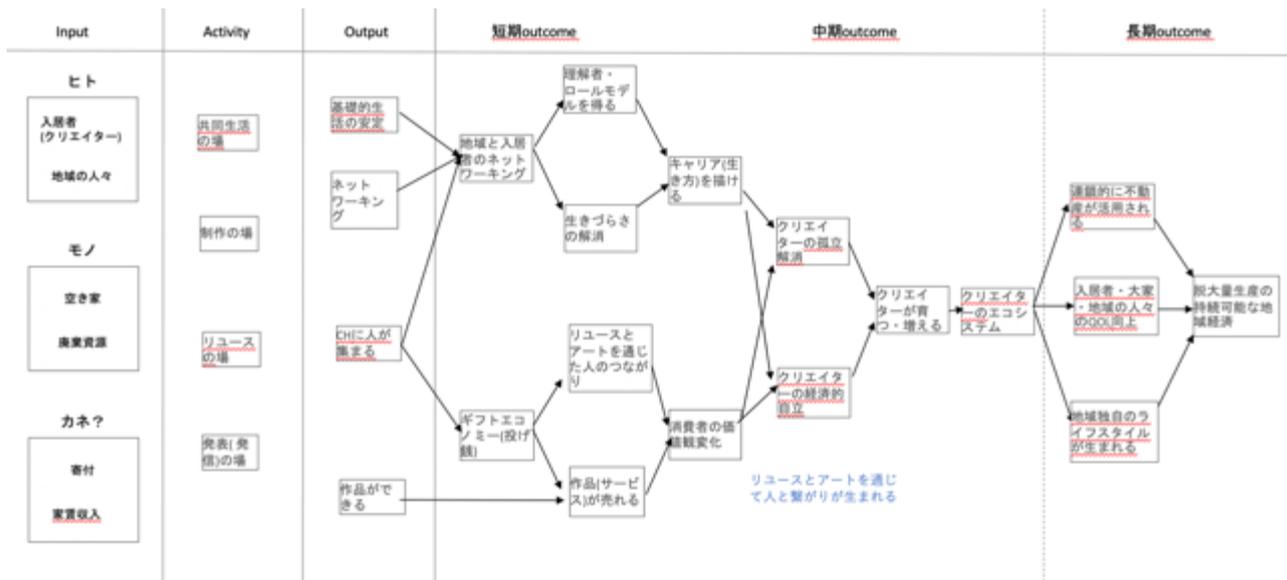
④ 活動場所(アトリエスペース)の提供

物資を集める空き家の一面を制作用のアトリエとして活用。入居者の制作の場として提供。

⑤ 地域交流 (入居者の発信・支援)の場：物々交換市

入居者や地域の作家の発信の場として、月に一度、作品を発表するイベントを開く。このイベントでは作家の作品と地域の方々支援の気持ちでもちよった物を交換可能。交換しない場合は投げ銭で作家の作品を応援する。食器や衣類などおもちゃなど様々な物品が交換され、地域住民の交流の場となる。交換しない人が投げ銭をしたり、集まった物品をリユースすることで運営につなげる。

3.2 期待される効果・KPI



図：クリエイティブハブのロジックモデル

首都圏で経済的に孤立しているクリエイターを石巻に誘致し、彼らに向けて生活の場、製作と発表の場を提供する。また、地域の余剰資源を受け入れたアーティスト向けに提供する。

このことにより、クリエイターの孤立の解消と経済的自立、リユースとアートを通じた高域での関係人口コミュニティの形成、消費者の価値観の変化を促進する。

また、関係人口の形成を通して、不動産の連鎖的活用・地域のステークホルダーの QOL 向上・地域独自のライフスタイルの形成を目指す。

① input

- ヒト：入居者(首都圏で孤立するクリエイター)
- モノ：空き家、廃棄資源、余剰資源(地域で余っているモノ)
- カネ；家賃収入、寄付

② Activity

- アシュラム：シェアハウスを一部無償提供することによる共同生活の場と自立支援
- クリエイティブ・ハブ：廃倉庫のリノベーション製作の場の提供と、
- カネ：寄附金集め、クリエイターへの投げ銭

③ 短期アウトカム(KPI の検証ポイント)

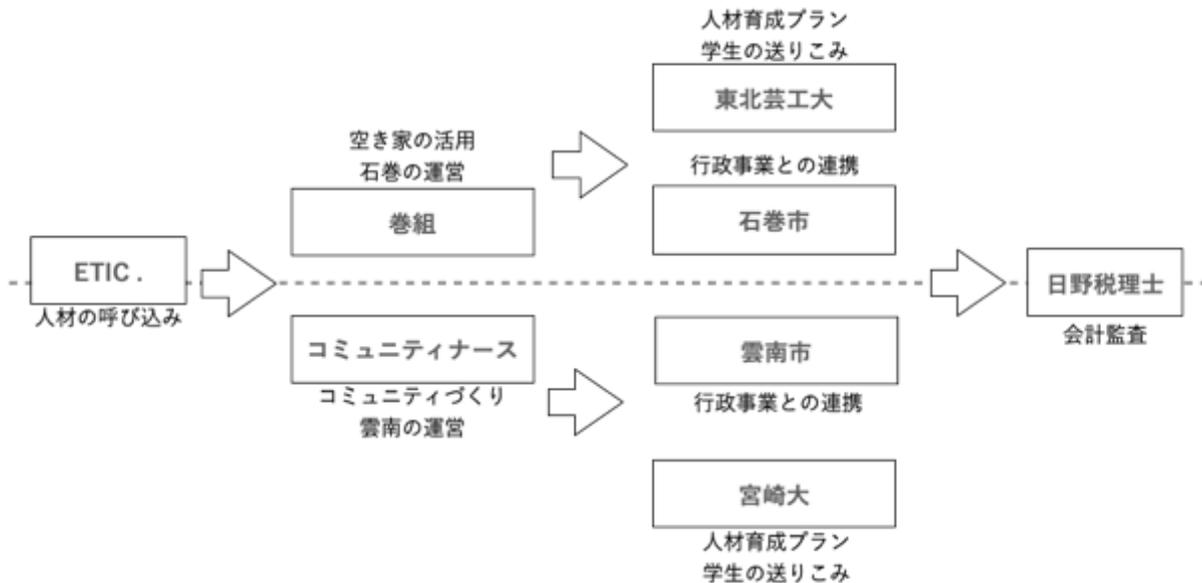
本事業では、下記のポイントを KPI の検証ポイントとする。

- ア) 共同生活の場/アシュラムへの入居者の人数：目標値 10 名以上
- イ) モノ・カネなど資源の寄付者：目標値 200 名
- ウ) イベントへの参加(クリエイティブハブに人が集まる)とネットワーク：目標値 100 名以上

4 事業実施に係る運営体制

4.1 事業実施体制

(2) 実施体制



4.2 事業実施団体及び関係機関の役割

(1) 民間組織

① 合同会社巻組：全体事業コーディネーター

資産価値の低い空き家 30 件程度の活用を通して、石巻市内において 5 年で 100 名の居住支援を行なってきた。また、インターンの促進、起業支援プログラムの組成、リモートワークの推進を通して 5 年でのべ 300 名の人材に対して、関係人口づくりを行う。

② Community Nurse Company 株式会社：全国 4 2 都道府県へのコミュニティナースプログラム修了生を輩出しているほか、プログラム修了生への移住定住にとらわれない働き方へのマッチング支援を行なっている

③ 非営利活動法人エティック：過去プログラム参加者数約 8,800 名。社会起業家輩出数約 1,500 名。連携地域は全国約 70。東日本大震災時は右腕人材 250 名を東北へ送り込む。現在、石巻市や雲南市を含む 10 自治体とローカルベンチャー推進事業を実施中。

(2) 自治体

① 宮城県石巻市地域振興課：空き家活用事業や人材出口としての地域おこし協力隊制度の運用で協働

② 島根県雲南市定住推進課：お試し暮らし、お試しワークなどを希望する人材への居住提供や事業所紹介などマッチングでの協働

(3) 大学

・東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科矢部寛明：人口減少が進む地域における人材育成を専門とし、主に高校生や大学生をメインターゲットとした関係人口創出を宮城県気仙沼市を中心に展開している。

5 事業実施内容

5.1 実施スケジュール

実施事項	8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月	
	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下
1 (1)地域との関わりを持つ機会を創出	人材 マッチング	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
2 (1)地域との関わりを持つ機会を創出		09/30 最終検討 会議(オン ライン)	09/27 ギフトバ ンクオー プ		10/19 石巻集計会議(オンラ)		11/02-04 雲南集計		12月16-18日 視察・検討会議#		1/21-23 検討会議#石		2/15-17 報告会	★
3 (2)関わりを持続的なものとする仕組みの検討	PR動画の作成	写真撮 影	専用は イトにて オープ	専用は イトオー プ					★				PR動画UP	
4 (3)自立化・自走化の検討	参加者アンケート作成	参加者アンケート実施						成果分 析		★	★			★
5 (4)成果検証等 (参加者アンケート・報告書作 成等)							★				イベ ント 結果の 情報発 信 総括会		★	★
6 (5)他地域への展開可能性 の検討											報告書の作成			
7														
8														
9														
#														

(1) 地域との関わりを持つ機会の創出

利用者向けのワークショップは月に1度開催された。コロナウィルスの感染拡大に伴い、大勢で集まることが危ぶまれた時期もあったが、反屋外での活動であったため、スケジュール通りに進行。地域内のイベントであったため、集客についても大きな影響をうけることなく予定通り進行した。

(2) 関わりを持続的なものとする仕組みの検討

① 雲南と石巻の意見交換については当初、お互いの地域を2ヶ月に一度程度行き来して交流する予定であったが、コロナ禍での外出規制などにより飛行機の運行本数が変わるなどスケジュールの調整が困難な状況が発生した。このため、オンラインに切替ながら行った。

② 検討会議については講師を招いて公開で行う予定であったが、コロナ禍で講師を市外から招いてそれに対して多数の人間で集まるということが困難な状況となった。このため、メンバーで視察として現地をまわり運営の知見をえる形にした。

(3) 自立化・自走化の検討

参加者アンケートについては予定通り実施された。

(4) 他地域への展開可能性

講演イベント等を通して出会った地域の行政やまちづくり関係者むけに現地に赴いて意見を交換し、展開可能性を意見交換した。当初の予定が組みづらかったが滞りなくすすめることができた。

5.2 事業の広報・アプローチ

(1) Web サイト[対市外]

専用の Web サイトを作り、主に入居者の情報や活動を発信。イベント情報なども統合している。

(2) SNS 発信[対市内外]

Instagram と facebook をメインで活用。子ども連れのファミリー層は主に、これらの SNS をみてイベントなどに参加。特に、ママ友などの女性コミュニティは、情報に敏感なリーダーの女性が情報をキャッチしてコミュニティの中で共有してくれる。リピート率も高い。

(3) Youtube LIVE 配信[対市外]

活躍しているアーティストなどのゲストを呼び、入居者との対談企画などをセッティングすることで、入居者の活動を発信する。この配信などをみて首都圏からイベントに参加したという新規の参加者もいた。期間中、6 回行った。

(4) PR 動画の配信 [対市外]

石巻市に居住するアーティストの活動を事例にイメージ PV を作成した。公開はこれからになるが、Web ページなどに配信する予定。

(5) チラシの作成[対地域]

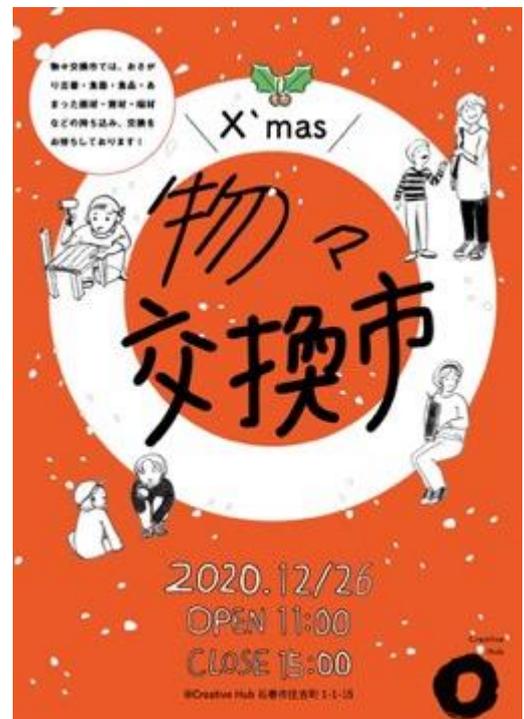
イベントのチラシを作成し、地域のマンションや店舗などに配布。月に 200 部程度。こうしたチラシをみて、地域に移住したばかりの住人も参加してくれることがあった。

(6) プレスリリース(メディア発信) [対市内外]

イベントの度に主にローカルメディア向けにプレスリリースを打った。日経新聞・朝日新聞などの全国紙のほか、TURNS などの業界紙。河北新報や島根県のケーブルテレビなどローカルメディアが取り上げてくれた。高齢の参加者は、主にローカルのメディアを見て問い合わせや、参加して下さることが多かった。

(7) 考察

- ① Under50 歳代の新規の関係人口を掴むには facebook や instagram などを通じた発信が有効
- ② 地域の高齢者層の巻き込みには、地元紙などローカルメディアが有効



5.3 活動内容① 地域との関わりを創出する活動

(1) 物々交換市

入居者や地域の作家の発信の場として、月に一度、作品を発表するイベントを開く。このイベントでは作家の作品と地域の方々支援の気持ちでもちよった物を交換可能。交換しない場合は投げ銭で作家の作品を応援する。食器や衣類などおもちゃなど様々な物品が交換され、地域住民の交流の場となる。交換しない人が投げ銭をしたり、集まった物品をリユースすることで運営につなげる。ハロウィンやクリスマスなど季節感をだしながら、物々交換を生活のなかで日常化する仕掛けづくりをおこなった。

① 実施概要

7月25日(土) 企画：パフォーマンスの発表 参加人数 30名(市内参加者25名、市外参加者約5名)

8月25日(日) 企画：パフォーマンスの発表 参加人数 30名(市内参加者35名、市外参加者約5名)

9月27日(日) 企画：舞台制作WS 参加人数 40名(市内参加者30名、市外参加者約10名)

10月25日(日) 企画：ハロウィン参加人数 30名(市内参加者35名、市外参加者約5名)

11月29日(日) 企画：焚き火 参加人数 20名(市内参加者20名、市外参加者約0名)

12月28日(土) 企画：クリスマスツリーWS 参加人数 30名(市内参加者35名、市外参加者約0名)

1月31日(日) 企画：正月遊び参加人数 40名(市内参加者35名、市外参加者約0名)

② 出展作家の出展内容

パフォーマンス、木彫アート、ペインティング、けん玉パフォーマンス、フリーマーケット、野菜販売、レザークラフト、料理、音楽、空間美術、料理の提供など

③ 寄付交換された物

参加者より持ち込み：食器類、衣類、日用品、家電

出展者より持ち込み：ロスフラワー、規格外の野菜、古着、木端材、端材生地 など



最初は巻組のシェアハウスに入居する作家がメインだったが、後半は地域の花屋などの商店主が事業で余ったものを持ち寄ってくれるようになった。

5.4 活動内容② 関わりを持続的なものとする仕組みの検討

(1) 先進事例を取り入れるための検討会議の実施

① 12月17-18日：検討会議 福岡市/久留米市

17日

・福岡市内にてビンテージビル(古いビル)の活用を通して、クリエイターの入居や関係人口に取り組むスペースRデザイン(株)吉原勝巳氏が手掛ける冷善荘を訪問し、空き家の活用方法やクリエイターむけ不動産の価値づくりについて知見を得た。

・吉原氏の案内で、糸島市の前原地区でゲストハウスを通じた関係人口づくりや商店街へのテナント誘致の活動を行う前原宿ことのはのオーナー野北智之氏と意見交換を行い



18日

・吉原氏がオーナーを務める、久留米市内の江戸屋敷アパートメントにて見学ツアーに参加する。久留米市の観光協会と連携し、空き家の見学ツアーやDIY賃貸の活用について関係人口を呼び込む活動を見学し、空き家活用を通じた関係人口づくりについて知見を得た。

③ 2月15-17日：検討会議 長野県諏訪市・松本市

2021年2月15日(月)

リビルディングセンタージャパン視察

<http://rebuildingcenter.jp/>

長野県諏訪市

面会者：代表取締役 東野唯史さん、おみせとじレスキュー 千葉夏生さん



- ・2012年に友人たちと5人でスタート。メンバーは現在、14名。売り場担当とレスキュー担当を分けている。
- ・当初は東野さん自身(設計)と妻(カフェを担当)ができる範囲をイメージして、あまり事業を拡大しないつもりだった。
- ・新婚旅行で訪問したポルトランドで見たリビセンを参考としていて、アライアンスなどはないが公認。

- ・地域の材が地域の中で循環するような社会をつくりたい
- ・古材屋との違いは、何でも買うのではなくセレクトしているところ。古いものだけではなく新しいものも混ぜている。専門家が古材を鑑定するのではなく、素人のセンス。解体時に無料で全部もらって欲しいと言われることもあるが、無料にすると処分をそのまま託されることになるため、選ぶためにもわざわざ買い取りというスタイルにしている。古道具市場仕入れではなく、個人から購入。「売れるぞ」というものばかりの店だと逆に面白くない。それは他のアンティークショップに任せればいい。
- ・買取価格は売値の5%くらい。
- ・利用する人は世代もさまざまで、ホームセンター代わりに道具を買いに来る近所のお父さんもいれば、県外からも半分くらい。
- ・サポーター制度もあり、月300名くらいが各々のスキルに合わせて活動。気分転換に...と都会のビジネスパーソンがくぎ抜きをしたり、4ヶ月くらい滞在する人も。ボランティアはHPにあるフォームから申し込むスタイル。
- ・カフェを含むリビセンの中ではさまざまなワークショップも実施。（刺繍や廃材を使ったテーブルづくり等々）
- ・WSのテーブルは通常4万円のもの3万円で作れる価格感。
- ・リビセンの古材を使用し、店舗やゲストハウス等の設計の仕事もしている。
- ・リビセンができて移住者が増加した。

<ポイント>

- ・リビセンにより新たな仕事ができる。
- ・ボランティアの拠点。関係人口の拠点。
- ・ゲストハウスなど、さらに関係人口の拠点の設計やプレイヤーのハブとしても機能。
- ・ライフスタイルのショールーム
- ・ビジネスとギフトエコノミーのミックス

2月16日（火）

長野県松本市

栗日（カフェ+書店）

<https://sioribi.jp/>

※リビルディングセンターの東野さんが設計を担当

- ・店主は静岡市生まれの移住者
- ・4階建てのビルで、1階がカフェ、2階が書店、3階が宿泊
- ・ライフスタイルに関するセレクトされた書籍を自由に読みながら滞在できる
- ・オンラインショップもあり
- ・既存の店舗の外観をそのまま使用しているため、外観は「高橋ラジオ商会」車だと気づかないが、歩いていると気づく「知る人ぞ知る」

※参考 <https://squareup.com/jp/ja/townsquare/stores-sioribi>

(2) 石巻・雲南検討会議

② 10月19日オンラインによる検討会議

渡邊、矢田、押切が参加し、双方の状況についての確認や今後の方針について意見交換を行った。

③ 11月1～3日 雲南市市内における検討会議

・1日は、Community Nurse Company 拠点における子供向けのお下がり交換の企画を実施。物々交換により地域コミュニティの巻き込みや、子育て中の女性やコミュニティナースを切り口にした関係人口の広げ方について意見を交換した。



・2日夜には、雲南市政策企画部佐藤氏や、雲南拠点に関係人口の創出に取り組むヒトコトデザインなどと会談し、意見交換を行った

④ 1月22日 石巻市内における検討会議

サーキュラーエコノミーの専門家である Circular Initiative & Patnersの安居昭博氏、鴨志田農園代表の鴨志田純氏を石巻市内の巻組拠点にむかえ、地域のプレイヤーを招いて、循環型のビジネスをつくる方法やそれにともなって関係人口を作る方策について意見交換をおこなった。黒川温泉における旅館の生ゴミを利用した堆肥づくりやコミュニティづくりなどを事例に、地域課題の解決からどのように関係人口形成にひろげるかについて知見を得た。



5.5 活動内容③ 自立化自走化の検討

活動を通して、見えてきた自立化・自走化にむけたポイントは以下の通り

(1) クリエイターの巻き込みによる関係人口づくり

福岡・長野それぞれ、ものづくりやライフスタイルに感度が高い層を積極的に地域に巻き込むことにより地域に移住者が増え、新規のスモールビジネスが地域内に育っている。

また、そうした移住者らが、店や宿泊施設を開くことによって新たな関係人口づくりにつながっている。

(2) 事業や地域の作業への巻き込みによる関係人口づくり

例えば、リビルディングセンターでは、「サポーター」という、ボランティアで廃材の解体を全国から手伝いにくる人材が年間300人程度集まっている。そのうちの数人が移住やリビルディングセンターでの就

労につながっている。このように、活動自体は単純作業でも、市外の人材がなにか地域に貢献することで関係人口となることがわかった。

また、久留米では「不動産見学ツアー」や「DIY体験」などニッチなコンテンツによって、クリエイティブな関係人口を巻き込んでいる事例がみられた。観光向けのものとは距離のあるコンテンツでも、地域の独自の取り組みをコンテンツ化することで、クリエイティブな人材やニッチな層の巻き込みに有効であることがわかった。

(3) ギフトエコノミーによる関係人口の形成

物々交換や不要物の寄付などは、実際に現地にいけなかったり、ボランティアとして関われない人々でも気軽に関わりをつくることができる。また、寄付をすることによって活動に対して愛着がわくと活動のフォロワーとなる。なにか特定の地域や団体に関わりたいと思っけていても拘れなかった人々のあらたな関わりしろとなったと言える。

(4) 空き家の活用による関係人口形成の持続化・自走化

従来、不動産は基本的に一世帯が一軒をつかう想定であるが、関係人口を形成することで地域への滞在の方法が多様化すると不動産の活用方法も多様化し、新たな需要が生まれる。また関係人口が移住に結びつくことにより、不動産需要につながる。不動産は関係人口による経済効果を可視化する上で非常に重要なフックになっていると言える。

6 モデル事業としての成果検証

6.1 事業成果（目標達成状況）

事業の目標・達成状況

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	共同生活の場へ1ヶ月以上滞在した入居者数 10名	20名
2	モノ・カネなどの資源の寄付者数 200名	210名
3	クリエイティブハブの場やイベントを通して ものづくりや文化・芸術に取り組む人材	イベント参加者数 のべ220名
4		
5		

6.2 事業成果（関係人口の地域とのかかわり方）

(1)入居者の関わり方

雲南・石巻それぞれ、10名ずつのクリエイターや学生たちが期間中に1ヶ月以上滞在した。彼らは自身の制作活動に取り組みながら、介護や一次産業やその他の作業など地域の仕事に取り組んだ。石巻では、10名中5名が2021年3月以降も継続的に石巻に滞在。Creative Hubに滞在中に地域の仕事にかかわりながら、自分らしい生き方を見つめなおすことで、地域と深い関係人口を築くことができる。

石巻の入居者のプロフィールと地域への関わり。

①福岡萌香(20)

2月までアメリカの美大に通っていたが、コロナショックで海外での勉強が続けられなくなる。製作やネクストステップを考える上で、Creative Hubに参加

②吉田恵(24)

東京で、アルバイトをしながらパフォーマンスアーティストとして活動していたが、コロナショックで、アルバイトが減り、展示の機会も減ったため Creative Hub に参加。本事業の事務局としても関わり、イベントの企画などに参加。地域の介護施設でのアルバイトにも関わる。自身で石巻で芸術団体を立ち上げ、石巻で4月以降も活動を続ける。

③佐伯誉怜(22)

山形県内の美術大学に通学。大学の授業がオンラインとなり、卒業制作に取り組みながら石巻に滞在。石巻市内のまちづくり会社に就職。4月から石巻に移住。

④松崎世界(24)

大阪府内の大学に通う。大学の授業がオンラインとなり、石巻に滞在しながら映像制作やDIYの活動に取り組む。

⑤ 北村颯生(22)

コロナショックの中、就職が決まらず、1ヶ月石巻に滞在しながら、職を探す。ヒップホップの楽曲を制作。その後、石巻市内のITの会社に就職。4月からは隣町の東松島市で働く予定。

⑥ 松本あかね(19)

東京で、ミュージカル俳優として活躍。コロナで講演が休演となり、石巻で制作活動に取り組む。

⑦ 小川譲史 (23)

パフォーマー。東京都の葛飾区で福士施設に従事しながら、演劇の活動を行う。今後地方でも活動展開を検討している中、石巻で作品制作を行う。子供の教育に興味があり、滞在中、石巻の児童館でボランティアにあたる。

⑧ 樋口圭介 (25)

パフォーマー。9月に劇団を退団し、今後のキャリアについて検討する中で石巻に滞在し、作品制作を行う。滞在中に地域の農業などに関わる。

⑨ 中田直樹(23)

フランス留学中にコロナ禍で帰国を余儀なくされる。留学できなかった時間を利用し、石巻市内のまちづくり会社にインターン。4月以降は大学生活にもどる。

⑩ 山田はるひ(25)

首都圏での仕事を退職し、石巻にUターン。美術系の大学卒業したため石巻で個展を行い、その後、石巻のUターンし、石巻の広告代理店で働く。

(2)モノ・カネなどの寄付者

①クラウドファンディング寄付者 159名

期間中、7月～9月初旬までクラウドファンディングを実施し、159名から約180万円を収集。返礼品として、入居者の作品や弊社管理の滞在施設への滞在権が配布された。このため、寄付して関係をつくるのと同時に石巻を実際おとずれるきっかけにもなっている。

②物資などの寄付者 30名 (1月まで)

市内外から、石巻に滞在するクリエイターを支援したり不要物をあずけるためイベントに参加したり、個別に物資をもってあつまった。イベントをきっかけに首都圏から石巻に集まったものもいた。

(3)イベントへの出展・参加者

物々交換市には入居者以外にも15組の出展者があり、自身の活動成果を披露した。イベントには地域の高齢者や商店主、子ども連れの家族などが参集し、多世代で交流する場となった。

6.3 事業成果（その他）

- ・入居中のクリエイターがイベント運営などにも実際に関わった。
- ・視察や事例研究を通して、あらたに地域間のつながりを築くことができた。
- ・Creative Hubのプロジェクト以外で弊社のシェアハウスに滞在する住人が関係人口のサポートに回っている。

6.4 本年度の課題と対応

(1) コロナ禍における人の移動や交流の困難性

当初、もう少し石巻と雲南の人材交流を行う予定であったが、移動が制限されて困難であった。他拠点で活動する意義が出しづらかった。

コロナの感染拡大が落ち着いた段階で、広域連携の意義についてはもう一度考えたい。

(2) 応募から入居までのフロー・ロジ整理の必要性

無償入居について受け入れ可能なキャパシティが限られているため、応募が増えた際にどんな基準で選定するかが難しかった。

(3) 寄付者との関係性のつくり方

クラウドファンディングや物資の寄付者との継続的な関わり方についてももう少しフローが作れるとよかった。

6.5 今後の事業のあり方

(1) 滞在スペース・制作スペース(不動産)の収益化

コロナ禍で困窮している人材支援の文脈で今年度は無償入居を実施したが、来年以降は収益性を検討する。ワーケーション文脈でのサービス展開、新しい方法での空き家活用や滞在需要づくり、プログラムの整理と参加料金の整理を行い、広報に力をいれる。

(2) 物資の販売による収益化

期間中に様々な物資があつまり、イベントでは交換された。また、長野県での視察を通してリビルディングセンターで廃材や物資の販売が実際に行われている様子を見て、商品化は可能であることがわかった。

(3) 多地域展開の可能性追求

今年は実施にはいたらなかったが、同じコンセプトで活動を行う地域同士で交流が行われることの意義を模索したい。

(4) 物々交換を通じた関係人口の可能性づくり

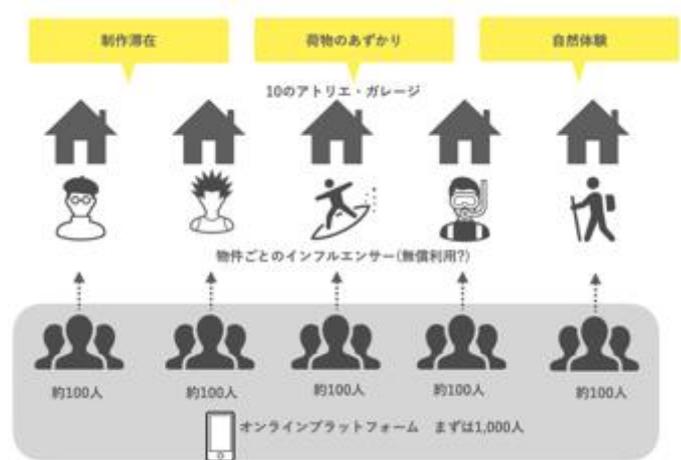
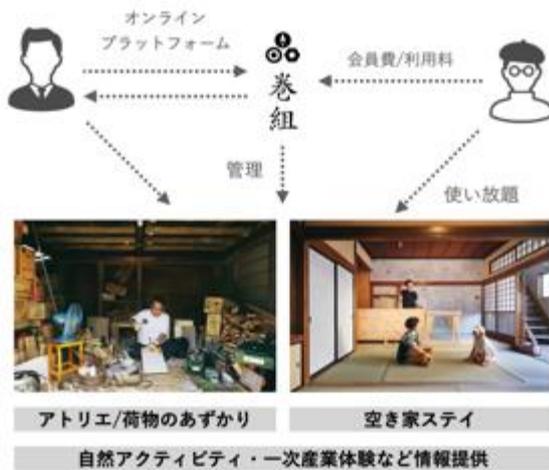
物々交換や物資の寄付をとおして気軽に地域に関われる層の幅がふえることがわかった。この可能性を追求する。

7 自立化・自走化の検討

7.1

(1) 滞在スペースの収益化：クリエイティブステイ

若手クリエイター以外にも首都圏でスペースを持つことが難しく、制作活動が制限される人々が幅広い世代存在することがわかった。そこで、こうした人材のプラットフォームをつくり、空き家を彼らの制作や滞在スペースとしてマッチングする。こうした事業を、空き家問題を抱える自治体向けに展開する。



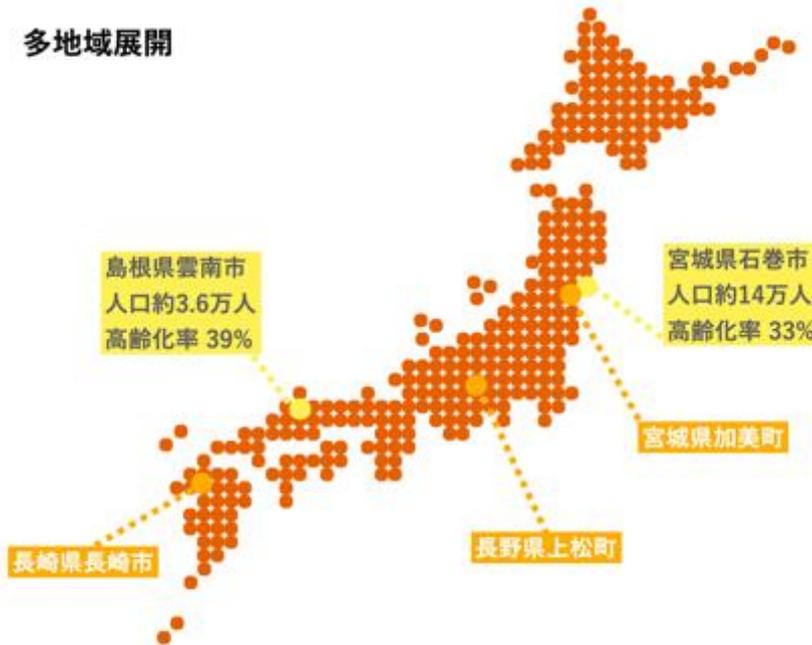
(2) 物資の販売フローの整理

集まった物資を価値化して販売する。販売スペースの管理や物資の収集フローを整えることで収益化をはかる。

8 他地域への横展開の可能性の検討

8.1

多地域展開



空き家問題の解決にむけて、ものづくりやアートを生業とする人材を求める自治体は多く、今回、3箇所の自治体への展開可能性が見えた。

(1) 長崎県長崎市

斜面地における空き家問題が深刻化している地域である。一般社団法人 Nagasaki Bay Design Center の梅元氏と連携し、美術大学不在の長崎県においてクリエイティブな人材の呼び込みや空き家活用についての可能性を広げる。

(2) 長野県上松町

上松技術専門学校と連携し、地域おこし協力隊制度を活用した木工人材の受け入れや、ふるさと納税を利用した木工製品の販売をすすめる上松町と連携し、空き家バンクの物件を利用しながら Hub の導入を検討する。

(3) 宮城県加美町

国立音楽大学院の誘致などクリエイターの移住を積極的に進める加美町にて、空き家バンクの空き家を活用し、クリエイターの誘致を進める。

